

gravure

1



山村の暮らしを伝えたい
豊かな心をつくりたい

岩手県山形村・バッテリー村



与えられた自然立地を生きかし／この村に住むことに誇りを持ち／一人一芸何かをつくり／都会の後を追いつめず／独自の生活文化を伝統の中から創造し／集落の共同と和の精神で／ここだから出来ることでなければ出来ない／生き生きとした生活を築こう

これはバッテリー村民憲章だ。バッテリー村は村長である木藤古徳一郎さんが十九年前に岩手県山形村の木藤古地区に開村した体験学習の里。

バッテリーとは、一本の丸太を削りだして杵にして沢の水を利用して雑穀を製粉するものの呼称。昔は県北一帯の山村で見ることができたという。「バッテリーは貧しさの象徴みたいなもんだが、大事なものだ。バッテリーの音を聞いていると、大事なものを忘れていないかと問いかけてくるような気がするんだ」という徳一郎さんの言葉が誇張に聞こえない雰囲気。バッテリー村はたたえられている。森の叫び、自然の叫びが聞こえない人間が多くなった。自然の中で逆らわずゆったりと時を送る、そういう環境での「体験」だからこそ、意義があるのだ。

まずここでの体験学習にはカリキュラムがない。時間を決めて、さあこれをやろう、次はあれをやろうということがない。やりたい



ことをやればよい。中には森の中でポーンと本を読みたいという人もいるという。「画的にやろうとするから面白くなくなるんだよ」山の手入れ、体験農場の草取り、牧場の手伝い、そして自炊。誰からも押し付けられない体験だから、生きた体験になる。身に沁み込む。

今回は東京の明治学院大学の学生たちが夢織（木の皮を使った織物）と夢編（縄ない）にほどもちづくりを体験しにやって来たが、体験が始まる前には「囲炉裏を囲んでまず語らいから」ということになる。自己紹介からいろいろな話に広がっていく。囲炉裏の火には、言い表せない不思議な魅力がある。農村の近代化の名の下に次々と姿を消していった囲炉裏。その囲炉裏を復活させることが徳一郎さんの最初の一步だったという。

囲炉裏端ではほどもちづくりが始まった。ほどもちとは胡桃と黒砂糖を包み込んだ焼餅。これを囲炉裏の中の灰に埋めて焼く。「ほど」は囲炉裏の方言。「焼き具合はどうやって分かるの？」と聞く大学生。「勘だねえ」と木藤古スミさん。スミさんはほどもちづくりを教えるにやってくるご近所さん。誰もがひとつは「名人」というのが徳一郎さんの考えだ。



ものづくりをやっていると「無心」になる。まわりで何をやっていようと耳には入ってこない。現代人はそういう心をどこかに忘れてきたのだろう。大切な心を。「ものづくりは心をつくること」とは徳一郎さんの言葉だ。今回参加したある学生はこう言った。「学生はインターネットや大学の講義で最先端のことを知っているつもりだけど、このように情報量の少ないところで木藤古さんはまるで最先端のことを言っているようだ。これが温故知新」。

徳一郎さんは言う。「今どきの若い人は：とよく言われるけど、ここに来る若者はそんなことないよ。この人たちが将来の日本、世界を考える人たちなのだから未来は明るいよ」と。

役場や農協などに勤め五十三歳でこの地にUターンしてきた徳一郎さん。始めは「あの屋根だけは直そう」と父親に進言したという。あの屋根、そう茅葺の屋根である。今ではこの辺りの集落でもあまり見かけられない貴重なもの。「あの時直さなくてよかったよ」。

今、徳一郎さんは「夢織・夢編・夢染」をテーマに掲げる。「オレは看板が先行するんだ」と笑うが、確かな足取りでアイデアを現実のものにしてきたのは事実。そんな徳一郎さんと夫唱婦随でやってきた奥さんのミツさんは「孫は来るわ、息子娘は来るわ、親戚は来るわという感じで歳を取っている暇はないわ」と目を細める。

なにかを残すというとき語ることは大事だ。知っている人が語り継いでいかなければ残すことはできない。しかし語りはその場限りでもある。徳一郎さんは「生活文化史として文章に残しておきたい、下手でもいいから。それが私の夢です」と言った。バッテリー村は来年開村二十年を迎える。

■連絡先

バッテリー村
 (木藤古徳一郎さん方)
 TEL 0194-72-2959